

教育実践としてのスリランカ交流キャンプ

神崎 雄二

チャプレン室主催のフィリピンキャンプが、20年という長期にわたる営みを終えた。それに伴って新しく企画されたのが、スリランカ交流キャンプである。そこで、なぜスリランカなのか、キャンプのねらいは何なのか、どこで何をしたのか、そこで与えられた気付きや学び、あるいは成長等について、改めて整理してみたい。

(1) なぜスリランカなのか

フィリピンキャンプが20年もの長期にわたって継続されて来たことは、驚きに値する。受け入れ側の忍耐と愛情を考えれば、それはもう感謝の述べようもない。ただ相手側の困難さを考えれば、『『もうそろそろ終わりにしようではないか』と相手方から言われる前に、こちら側からこのキャンプの終了を申し入れるべきである。いつまでも永遠にお願いできるわけではない。始めがあれば終わりがある』というのが、直接の担当者であった小林進チャプレンの弁であった。私もそれに同意した。

毎年日本から行く学生は年々異なっており常に新鮮な気付きと感動を与えていただくが、相手方からすれば、来

る学生は異なっても、やっていることはそう大差はなく、対応するにも困難さが目立ってくる。20年前のサガダの聖マリアハイスクールの全校を上げての大歓迎の仕方と20年後の同校の歓迎が異なるのも当然と言わねばならない。このまま、いつまでもズルズルとお世話になることは出来ない。

しかしながら、電気も水道も通っていないフィリピンの山岳地の村で、2週間受け入れていただく中で、日本の学生の心の中には、静かな、あるいは急激な価値観の転換が生じ、東京では決して考えることの出来なかった様々なことを、自分の頭で考え、試行錯誤的に日々を生きる体験の意味ははなはだ大きい。しかも村人の深い愛に支えられつつ、新しく、生きる為の洞察や自分にとっての人生の意味を見出すといった出来事が、しばしば生じるといふ恵みを思う時、こうしたキャンプを一切やめてしまうことは、あまりにももったいない気がする。

では、場所を変えて行ってはどうか。そうした流れから、新天地を求める営みを開始した。

ミャンマーには、聖公会が小さいな

がら預言者的役割を演じている部分があり、新しい可能性を期待できると考えた。そこで、実際調査のために現地へ赴き、首座主教とも会い、各地を訪問したが、政府の執拗な監視があり、学生が村人の家々にホームステイすることも許されていないため、ここ当分は代替地とはなりにくいことを確認した。

次に白羽の矢を立てたのが、スリランカである。この国の聖公会のクルネガラ教区には、過去5回以上、立教女学院の交流キャンプのため行っており、クマラゲー主教を始め、多くの司祭や村人との信頼関係が、すでに築かれており、状況がかなりの程度把握できていたので、同主教に我々の目的や願いを手紙で書き送った。するとただちに受入れを諒承するとの返事をいただいた。こうしてスリランカで次のキャンプが行われることになったのである。

(2) 目的の再確認

一体スリランカへ何をしに行くのか。何のために行くのか。これは単にフィリピンからスリランカへ移動したということではなく、改めてその目的意識を捉えなおしてみる必要がある。

1980年の第1回フィリピンキャンプの報告書の中で、当時のチャブレン大郷博司祭が次のように記している。

「戦争という出来事を直視しつつ…民族や生活、文化の違いを越えて、人と人とが理解し合うという事は、どのような事なのかを考えてみたかった。

また、フィリピンの人々の生活を通して、我々が生を受けている国、日本のあり方を考えたい。特にこの物質的豊かさの中で、我々が得たもの、そして失ったものは何なのか、彼等との生活を鑑として、我々の日常的在り方をじっくりと見つめてみたかった。」

このようなキャンプのねらいに加え、「アディタコ ボコダン ディ ガ ウイス」(良きものを分かち合おう)というフィリピンの側からいただいた言葉も立教フィリピンキャンプの目的の根底にあったと思う。

以上のようなねらいは、過去20年間続いたキャンプの営みの中に、常に通奏低音のように響いていたように思う。

スリランカ交流キャンプにおいても、基本的には、こうした伝統は継承していきたい。つまり歴史も文化もおおよそ異なるスリランカの村人と、どこまでも真実な出会いを求め、その出会いの中で、日本の文化・現状・自らの生き方を見つめなおし、また私達としても貢献できることがあれば、それを積極的に担っていきたい。

もう一点加えるとすれば、そうした営みを、すべて学生主導でやっていくことを通し、自主的、自立的、体験的な学びを深めたいということである。参加者募集に関する一切の事柄、事前学習会、現地での活動、帰国後の報告書作成から、次回隊までの一連の準備、そうした一切の活動を学生自身に担ってもらい、生きた形での学習を行いたい。連れていってもらうのと、自ら組

織して企画実行するのとは確実に違った効果が期待できると思うのである。

(3) 準備期の活動

学生主導型を徹底するための第一歩は、旧フィリピンキャンプ隊の1・2年生の中から、第1回スリランカキャンプ隊の核になる人材を募る事から始まった。これには3名の学生が名乗りをあげ、また他に2名のフィリピンに行った事のある学生が加わった。

クマラゲー主教との手紙による連絡（本当に立教大生であるのかと疑う程のおそまつな英文だった。しかしこれも、何度も何度も書き送っているうちに、次第に英語になっていった）、スリランカに関する学習、航空券の手配等、先遣隊3名を送るために必要なことは、学生自らで行うよう指導した。

そして1998年12月26日から翌年1月6日までの12日間、3名の学生、事務方1名、チャプレン1名でスリランカを先遣隊として訪問した。

クマラゲー主教の願いは、シンハラ人の村とタミール人の村の双方と交わってほしいというものであった。両者は、北部・東部を中心に戦闘状態にあり、その両者と交わることが、和解のしるしにつながると言われるのであった。先遣隊5名は、クルネガラ北部のヒリヤラ村（シンハラ人村）と中央高地南部のウナンカンダ（タミール人中心の村）の2つの村を訪問し、現状視察を行った。

村のサイズや活動の内容からして、

多人数の訪問は困難だと判断し、平地のヒリヤラと山岳地のウナンカンダで半数ずつ、合計20人で隊を組織することとした。

4月初旬から一般公募に入り、2日ずつ、池袋と新座で説明会を行った。出席者は約100人、実際の応募者は50人を越えた。そこで男女の比率、学年の均等性を考慮しながら、最終的には、抽選で参加者を決定した。

第1回の集まりは5月15日、以後約合計6回の準備会を行った。学習内容、話し合いの内容は、スリランカの歴史、文化、宗教、教育、シンハラ語学習、民族紛争、持ち物等実際の準備等々であったが、宗教については、議論が盛んに行われた。スリランカでは、学生がキリスト者でないと分かると、すぐ「ではあなたの宗教は何か」と問われる。彼等にとって宗教とは、その人が生きる思想そのものであり、その人の人格が何によって統一されているかを問うものである。そういう問いに対し、「私は無宗教です。宗教など信じていません」と答えると、その日本の学生は、「統一した思想が無い、その時その時を適当に生きる、チャランポランな人間」と勘違いをされることになる。そういうギャップの中で、どう応答できるのが、大きな議論となった。

(4) スリランカのどこで何をしたのか

第1回隊の出発は1999年8月2日、その日以来3週間の予定でスリランカ

に滞在した。

前述したように、隊は2つに分かれ、一隊は平地ヒリヤラに行った。水道も電気も通っておらず、トイレも一応水洗ながら、大地吸収式のものだった。

村はほとんどが農業中心の生活で、毎日の食卓は、畑でとれるものがほとんどだった。料理は朝昼晩、三度三度カレーであったが、何日かすれば、それらはおしなべてカレーといったものではなく、豆やかぼちゃや魚の煮物であって、カレー系の黄色っぽいスパイス類で味付けてあるにすぎないことが分かって来た。それらはいずれも恐ろしく辛く、額に汗をにじませ、鼻水をたらし、涙を流しながら食べるのであるが、いつしかそれにも慣れ、辛いながらもそこに甘みや酸味やコクを感じるようになるのだった。

村の一部を流れる川は、私達の憩いの場であり、午前中のワークが終れば、体を洗い、洗濯をし、水浴びをし、気付きや考えたことを交換する楽しみの場となった。日常生活の何を一番に思い出すかと問えば、皆、あの川での水浴びを思い出すのではないだろうか。

さて、我々の生活は、午前中8時から1時近くまで行われた教会の集会所の建築が中心となった。煉瓦を一段一段積み重ねていく仕事は、日々その進展具合が分かるだけに、非常にやりがいのあるものであった。村の大工2人の指導の下、ホームステイ宅のお父さんや子供たちも加わって、なごやかに工事は続いた。結局2週間の間に大屋



窓もできたぞ

根まであがり、内装外装を除く2LDKの基本的な建築が終了するところまで出来上がったことは、スリランカ側にとっても驚きだったようで、私達にとっても大きな達成感が与えられた。

一方山岳地のウナンカンダは、標高1,200メートルほどの高地にあり、村人のほとんどは、紅茶栽培に関係する仕事に従事している。

ここでは、教会の礼拝堂を新しく建てるワークを行った。しかし礼拝堂のサイズは大きく、また山岳地という土地の困難さもあり、低地から運ばれてくる建築資材を建立現場までかついで運ぶため、結局建立地の整備と土台の建築だけで2週間をついやしてしまった。(あとは村人の手によって継続完成され、1999年12月のクリスマス後にクマラゲー主教を招いて献堂式が行われた。)

ウナンカンダの生活は、食生活はヒリヤラと同様であったが、山岳地であるため気候は涼しく、過ごし易いものであった。ただ川辺や草地に蛭が沢山おり、これに吸いつかれて泣き出す者も出たが、慣れるとどうといったものでもなく、サッと取っては、ポイと投

げ捨てるたくましさも身につけていった。

村の生活の中で特筆すべき事は、村人達の優しさ、暖かさである。ホームステイ先の貧富の差はあるものの、いずれも私達のことに心底気を配って下さった。家で一番良い部屋を提供して下さい、誰よりも一番先に食事を与えて下さり、普段より一品、二品多くおかずを作って下さり、何を言っても真剣に応答して下さい、まるで私達が神の遣いか何かのように手厚くもてなして下さい。

しかし私達一人一人の心に残った最大のものは、あれをしてもらった、これをしてもらったというたぐいの事ではなく、私達を信頼し、愛し、常に支えて下さった暖かい人間関係であると思う。お父さんお母さんも、兄弟姉妹達も、子供達も、私達一人一人があるがままに、肯定し受け入れて下さった。それが何とも口に表現しにくい深い喜びを私達に残した。帰国後も、もう一度あの家に帰りたい、と学生達は口々に言う。

(5) 気付き・学び・成長

ヒリヤラにしろウナンカンダにしろ、美しい自然があった。ヒリヤラの家裏には岩の小山があり、仕事を終え、昼寝をし、おいしい紅茶をいただき、夕方には必ずその小山に上がった。美しい夕陽を楽しみながら静かに黙想するためである。そこでは一日の恵みを感謝し、またお世話になった一人一人



内装、外装も出来上がり

の為に祈った。またしばしば無くてならぬものは何なのかと考えた。東京での生活ではなくてならぬものは案外少ないのではないかと。あと何年生きるとしても、何を最も大事なものと生きていくべきなのか、一体何のために生きるのか。スリランカの田舎では、私ばかりでなく学生も皆哲学者のようになるらしく、自分の頭で考え、自分の言葉で語り合うのだった。

「お金は大事だけれど、お金のためだけに生きていく生き方は、もはやできません。」「じゃあ何を大事にして生きていくの?」「よく分かりません。でも、何か、人間に関わって生きていきたい、というか、人と人との交わりの中で、喜び合える何か……です。」「例えば、何?それ」「うーん、よく分かりません。まだ」

将来の事、恋愛の事、家族の事等、学校にいる時と異なった角度で、話し合えた事が実に多い。

スリランカの田舎という未知の世界に踏み込んでいく中で、これまで対処した事の無い事態に遭遇する。日本語でコミュニケーションができないという事態もその一つである。シンハラ語

やタミール語は、事前に挨拶ぐらいの事はできるようにして行くが、それで思ったことが表現できるはずもない。英語は何と言っても共通語の役割を果たすのであるが、その英語が、日本の学生は、ほとんど分からないといってよい。お手上げ、もうどうにもならない。しかしそこからその人らしい何かが始まる。いつしか言語以外のコミュニケーション手段が存在することに気付く。それは愛であり、開かれた心である。そこに導かれると、いつしか日本ですら言ったことのない話を、異国の人としている。それは物心ついた頃よりの大きな大きな自分の問題で、そこに自分がしばしば直面する諸問題の根源があることすら気付かなかったけれど、今、はっきりとそれを自覚する。そして私の前に来る。涙をボロボロこぼして、自分で整理しつつ魂の底から自らの問題を話す。その時問題の半分以上、解決しているのであった。

たかだか3週間ぐらいスリランカの田舎に行ったからといって、それが何ほどのことか、とも思う。事実どんなに素晴らしい体験をしたからといって、再び都会にもどり、日常生活が再開されると、全てのことが色褪せてゆく。しかし、事前準備から懸命になって自ら作り上げていったこと、今まで経験しなかったような他者からの愛を経験したこと、いつ帰って行っても受け入れてもらえるような第二の家族ができたこと、そしてささやかながら、むこうのコミュニティーのためになる仕事をし、それが皆から喜ばれたこと、それら一連の体験を通し、自分一人で生きて行くものでもない、できれば人と共に生きて行きたいと思ったこと、そういう聖なる諸体験は、学生達の生き様に、何らかの痕跡を残すと信じるのである。

(かんざき ゆうじ 本学チャプレン)